

純ちゃんのコーナー

(ロータリー3分間情報)

Part Ⅸ



伊丹ロータリークラブ

深川純一

目 次

1. 「永遠の課題・職業倫理」 その10	2
2. 「永遠の課題・職業倫理」 その11	3
3. 「永遠の課題・職業倫理」 その12	4
4. 「永遠の課題・職業倫理」 その13	5
5. 「永遠の課題・職業倫理」 その14	6
6. 「永遠の課題・職業倫理」 その15	7
7. 「永遠の課題・職業倫理」 その16	8
8. 「永遠の課題・職業倫理」 その17	9
9. 「永遠の課題・職業倫理」 その18	10
10. 「永遠の課題・職業倫理」 その19	11
11. 「永遠の課題・職業倫理」 その20	12
12. 「国旗掲揚・国歌斉唱の慣例」	13
13. 「フリーメイスンについて」 その1	14
14. 「フリーメイスンについて」 その2	15
15. 「日満ロータリークラブ連合会」 その1	16
16. 「日満ロータリークラブ連合会」 その2	17
17. 「日満ロータリークラブ連合会」 その3	18
18. 「日満ロータリークラブ連合会」 その4	19
19. 「ロータリーの日本化」 その1	20
20. 「ロータリーの日本化」 その2	21
21. 「ロータリーの日本化」 その3	22
22. 「日本ロータリーの精神伝統」 その1	23
23. 「日本ロータリーの精神伝統」 その2	24
24. 「クラブ例会のもつ意味について」 その1	25
25. 「クラブ例会のもつ意味について」 その2	26
26. 「栗を拾った話—石門心学に学ぶ—」 伊丹RC卓話	27

序にかえて

竹中秀夫会員の発案で始まりました3分間情報「純ちゃんのコーナー」は、昨年度もロータリー情報委員長竹中秀夫会員からの御依頼で一年間書き続けて参りましたが、既に満9年の歳月を閲することになりました。

人間、歳をとると、新しい情報が来たり、新しい勉強をしたりして、今まで自分の考えていたことが間違っていたことに気づきます。そして、歳をとって色々な情報が蓄積されているために新しい情報に対する理解度が早く、自分の目がよく見えてくるようにも思うのであります。

この情報の蓄積ということについては、ロータリーの例会をはじめ地区大会、IMその他あらゆるロータリーの会合では、職業の違う沢山の人達と出会うことが出来るのであります。したがって、様々な情報を授かることが出来、色々なことを学ぶことが出来るわけでありました。したがって、ロータリーというところは、将に人材の宝庫であり、私達が色々な人と出会うことが出来る貴重な場でもあります。

ロータリーはこれを「出会いの保障」といって、ロータリーの綱領の第1に「心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと」と規定しています。この出会いを保障している場がクラブ例会を始めロータリーの色々な会合であります。したがって、ロータリーで自分を少しでも高めようとしているロータリアンにとっては、クラブの例会は大変貴重な場なのであります。したがって、クラブとしても、ロータリアンがロータリーを理解し、それを実践することに役立つ良質な情報を積極的に提供すべきであります。これが意外に難しいのであります。毎年のことながら、例会での3分間スピーチで果たして十分なロータリー情報を説き得たか否か、内心忸怩たる思いであります。しかし、今後も出来る限り良質な情報をロータリアンの皆様提供出来るよう努めたいと思っています。

何はともあれ、昨年度は、「純ちゃんのコーナー」を25回に亘って話しました。しかし、年間の卓話数に比べると若干少ないように思いますので、今回はその話に加えて、私の今年の3月4日の伊丹クラブ卓話「栗を拾った話—石門心学に学ぶ—」を巻末に付け加えさせて頂きました。

誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

そして、この一年間、飽きもせず私の話を聴いて下さったクラブの皆様方の友情に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレット発刊に御尽力賜りました竹中秀夫会員はじめクラブ事務局の皆様方に心からなる感謝を捧げ擲筆します。有り難うございました。

2010年8月

深川 純 一

1. 『永遠の課題・職業倫理』 その10

前回は、日本が世界第二の経済大国を築き上げた原因は何かという話を致しました。では、現在のアメリカはどうでしょうか。確かに大国ではありますが国家の経済力としては、もう往年の力を持っていません。つい先日のご承知のとおり、自動車王国アメリカの象徴とも謂うべきGMが連邦破産法11条の申請に踏みきました。その結果、GMの株式の70%を国が所有することになりました。これはまさに企業の国有化であり、アメリカの自由主義の崩壊と謂わなければなりません。

このようになった原因は一体何処にあるのか。と言いますと、一つの原因としては、アメリカが自由競争をあまりにも尊重しすぎて、職業倫理を中核とする職人技術の育成に失敗したことにあります。

ところが、日本には当時まだ職人技術が生き残っていました。したがって、日本の車の優秀性が自動車王国アメリカの車を凌駕してしまっただけであります。

現に、GMの社長の娘は、もう一昔前から日本の車ばかり乗っていたのであります。

つい先日、5月29日の日本経済新聞の春秋というコラムにも、これを裏付ける記事が載っていました。その全文を引用しますと、「日米貿易摩擦が激しかったクリントン政権時代、ワシントンの政府職員は、自家用の車を選ぶのに苦心していました。何故かと言うと、拳を上げて日本叩きをする立場で日本車を乗り回しているのは格好が付かないからです。役所の駐車場は米国車ばかりでありました。

当時の橋本龍太郎通産相と対決した米国通

商代表部(USTR)のカウンター代表の車は、お世辞にも美しいとは言えない古い型のGM車でありました。冗談のつもりで『燃費はどうですか』と聞くと、真顔で『物凄くいい』と言り返されたという取材の思い出があります。これは国民が団結して自動車産業を支える空気が米国中に満ち満ちていたのであります。

あれから15年。米国人がデトロイトを見る目は一変しました。来日した米国通商代表部(USTR)の元高官から、こんな打ち明け話を聞きました。

『対日交渉のさなかに家族がホンダの新型車を欲しがって困った。オハイオ州で現地生産していると判ったので、これは米国製だと自分に言い聞かせて買った』

と言います。その愛車も買い換えの時期が来ました。

今、彼らが欲しいのは、ハイブリット車。現地生産を待てずに、日本からの輸入車を買ったそうであります。冗談で元幹部に『それは裏切りではないか』と訊くと、『GMの方が我々を裏切ったのだ』と真顔で答えが返ってきたのであります。

これは一体何を意味するか。GM幹部が驕り高ぶって高給を取り15年間も自己改革を怠れば、苦しむのが当然だというのであります。厳しい貿易戦争を生き抜いた戦士ほど、今日のデトロイトには厳しいのであります。

このように致しまして、職人技術というものは単なる技術だけではなくて、技術の根底に倫理というものを一つ持っています。

この倫理あるが故に日本の企業は、アメリカの経済社会を席捲しているのであります。

2. 『永遠の課題・職業倫理』その1 1 『職業倫理・競争の歴史』 8

。 前回、職人技術というものは、単なる技術だけではなく、技術の根底に倫理というものを一つ持っているが故に、日本の企業がアメリカの経済社会を席捲しているということを示し上げました。

。 そこで、この職業倫理の根底にあるものは、相手の身になって考えること、つまりお客様の身になって考える、使う人の身になってものを作る、という全ての人に対する思いやりの心であります。この心がなければ、企業は競争社会を生き抜くことが出来ないのであります。

。 レイモンド・チャンドラーという人が言ったように、企業は遅くなければ今日の厳しい職業社会を生き抜いて行くことは出来ません。と同時に、優くなければ、即ち相手に対する思いやりの心、即ち、愛とか倫理がなければ、企業は生きる資格がないのであります。

。 例えば、日本の車は、アメリカへ輸出する場合には使う人の身になって左ハンドルに変えています。しかし、アメリカの車は、日本へ輸出する場合も左ハンドルのままであります。これでは販売競争には勝てません。しかも、その他の点でも職人技術がありませんから品質も劣る、とあっては、アメリカ車に勝ち目はありません。

。 アメリカの経済社会は、市場原理主義によって自由競争、効率一本槍の社会となりました。労働者は簡単にリストラされる。したがって、労働者は、こんな企業に忠誠が誓えるかといって1ペニーでも高いところへ条件さえよければ移っていきます。これでは職人技術は育ちません。職業倫理は崩壊してしまいます。アメリカの経済は今や倫理のテコ入

れなしには、日本企業に勝つことは出来ないのであります。

。 アメリカの職業人は、迂闊にも、自由競争では力の強いものが勝つと信じていましたので、力の論理に酔いしれて、倫理の問題、即ち、心の問題を忘れてしまったのであります。

。 そして、今日の憂き目を見ているのであります。ところが、日本の職業社会も最近では職業倫理がおかしくなってきたことは御承知の通りであります。

。 人類社会は、経済活動においては基本的に自由競争の原則を維持しなければならないのではありませんが、そのためにはどうしても職業倫理が大切だということであります。戦前のアメリカは、1915年の道徳律があったように、この職業倫理が確立していたが故に国際社会に経済的指導性を発揮していたのであります。しかし、今は、職業倫理を忘れたが故に、アメリカ経済は凋落の一途を辿っているのであります。そして、その影響は、既に日本にも及んでいるのであります。

。 そこで、日本は、確かに敗戦の苦しみも知り、その苦勞に耐えて今日の大をなしたのであります。その原因が、勤勉、正直、即ち、職業倫理、そして教育熱心というところにあるとすれば、それは、未来の問題として、日本の若い世代の人達がこの職業倫理を失ったときに日本の経済は国際競争力を失うに至るということでもあります。今や、日本は、世界第一の指導国であります。私達は、この指導性によって得た幸せを出来るだけ長続きさせなければなりません。その考え方の根源は、職業倫理の世界にこれを見いださなければならぬのであります。

3. 『永遠の課題・職業倫理』 その12

今、我が国は、世界的不況の影響によって国内的にも色々な問題はありますが、グローバルな立場で眺めると、日本はやはり世界にリーダーシップをとる指導国であります。

そして今回は、この指導性の根源が職業倫理の世界にあるということを示しました。

したがって、職業倫理が歴史的に見ても如何に大切かと謂うことが判るのであります。

では私達はこの世の中を生きていくとき、どのような心構えが必要なのか。具体的に日常生活の場でどのように倫理を実践すればよいのが問題であります。

結論として言えば、職業を倫理的に営むべし、と謂うことでもあります。

では、それは具体的には一体にはどういうことなのか、と言いますと、全ての生活関係において自分の行動に愛を込める、ということでもあります。

昔、文豪ゲーテが、誠に美しい言葉を残しています。

「天に花咲いて星と謂い、地に花咲いて愛と謂う」

「愛」と言う言葉は、日本人の一番好きな言葉だと謂われているのであります。では、具体的に「愛」というものをどのように理解すべきでしょうか。

そもそも愛とは何ぞや、と言いますと、それに答えることは出来ないのであります。何故なら、それはロータリーの窮極の到達点だからであります。そこから先はないのであります。即ち、愛は、人間の心の窮極にあるものだからであります。

命ある限り人間が持っているものは、愛であり、倫理であります。命の大きな働きが心

の働きでもあり、それが倫理であり、愛であります。したがって、愛は人間に根源的なものであるのです。

さて、一般に、愛と言え、それは「他人への愛」が考えられていますが、私は、愛は本質的には「自分への愛」即ち、「自己愛」であると思います。

昔、インドに相思相愛の仲のよい王様夫婦が居ました。ある時、王様が最愛の奥様に対して、「よく考えてみると、私は、最愛のお前より、私自身の方が一番可愛いように思う」と仰いました。すると奥様も、「実は、私も、貴方より私自身の方が一番可愛いと思います」と仰いました。

そこで、王様は、「皆が自分自身が一番可愛いと思ったら、この世の中は成り立たないね。お釈迦様に聞いてみよう」と言ってお二人はお釈迦様のところへ行かれました。お釈迦様はお二人の話をお聞きになって「人間は誰でも皆、自分自身が一番可愛いのです。

それでよいのです。ただ、自分自身が一番可愛いように、相手もまた自分自身が一番可愛いと思っていることを忘れないように」とお諭しになりました。ここから、相手に対する「思いやりの心」が芽生えるのであります。

自分以外の人に対する愛が始まるのであります。そして、世の中の人達が皆このような心、即ち、愛とか思いやりの心を持って初めてこの世の中が成り立つのであります。

即ち、自分自身を愛することが出来て、初めて人を愛することが出来るのであり、世の中のことを考えることが出来るのであります。このようにして、初めて「人は育つ」のであろうかと思ひます。これがロータリーの心でもあります。

4. 『永遠の課題・職業倫理』 その1 3

「今回は、職業倫理の根底にある「愛」について、自分自身を愛することが出来て初めて人を愛することが出来、世の中のことを考えることが出来るのであり、このようにして初めて「人は育つ」と申しました。したがって、自分自身を愛することが出来ない人は、人を愛することも出来ません。そして、人から愛されたことのない人は、人を愛することも出来ないものであり、自分が愛されていないと人を愛することは出来ません。したがって、今の子供達が、いじめに走るのは、自分が愛されていないからだと思います。優しくされていない子は、人に優しくすることも出来ません。人に優しくすれば、その人は優しくなってくれます。子供を愛すれば、その子供は、他の誰かを愛することが出来る優しい子供に育ってくれます。

レイモンド・チャンドラーという人が言いました。「人間は、遅くしなければ生きていけない。同時に、優しくなければ生きる資格がない」と言っています。即ち、人間は遅くしなければならぬ、と同時に、優しさというものもなければなりません。人への思いやり、そして自分への優しさ。自分をいじめないこと、そして、他人をいじめないことが大切であります。

要するに、一人ひとりを大切にすることが大切なのであります。このようにして、結論を申し上げますと、愛は「自己愛」が出发点であると思うのであります。

では、この理屈を職業人に当て嵌めてみるとどうなるでしょうか。

私達職業人は、先ず自分の職業を愛すべきであります。自分の職業を愛すればこそ、や

がてそれが他者への思いやりとなり、他者への愛の心が芽生えるのであります。そのことによって初めて、職業人としてお互いに為すべきこと、為すべからざることを誓い合う所謂「職業倫理」の自覚に繋がっていくのであります。

そして、それがやがて企業の社会的責任の自覚へと発展して行くのであります。したがって、職業人にこの点の自覚がなくなると、職業倫理が頹廃します。更には最近の市場原理主義のように職業倫理を失って、ライブドアや村上ファンドのような金儲け一本槍の拝金主義となってしまいます。そして「資本の論理は力の論理」ということになり、大資本は益々大きくなって格差社会となるのであります。

そして、古代ローマの格言に「人は人にとって狼である」と謂われているように、弱肉強食の世界に陥って行くことになると思うのであります。

「歌を忘れたカナリヤ」という童謡があります。

歌を忘れたカナリヤは世の中に害を与えませんが、倫理を忘れた職業人は、世の中に迷惑をかけるどころか、やがては国を滅ぼすことにもなりかねないのであります。例えば、古代ローマの貴族が同性愛に耽ったために子孫を産めなくなって、50年にしてローマの貴族が没落して古代ローマ帝国が滅亡し、そのあと中世の暗黒時代が始まったという説もあります。このように、一国の興亡は、国民の倫理の頹廃によることも間々あるのであります。即ち、国や家が滅びるのは「魂」が減っているからであります。

だからこそ私達は、人間としてあるべき心、即ち、「倫理」を高めることに努めなければならないのであります。

5. 『永遠の課題・職業倫理』 その14

前回は、国が減びないためにも、人間としてあるべき心即ち、「倫理」を高めることに努めなければならないということを示しました。そのためには、先ず自分の職業を愛することが大事であります。先ず、自分自身を愛し、自分の職業を愛し、自分の企業をどのような不況期にも潰れない強靱な体質の企業に育て上げることがロータリーの第一義なのであります。

強靱な体質の逞しい企業に育て上げること。レイモンド・チャンドラーが言ったように、逞しくなければ、企業は今の職業社会を生きて行けません。それと同時に、優しくなければ、即ち、愛とか倫理がなければ、企業は生きる資格がないと思います。したがって、企業経営には、愛と職業倫理がなければなりません。

或る経営哲学者が「会社経営の根幹は愛である」と言ったように、「愛」は、会社経営の窮極の到達点であります。しかし、愛は、目に見えないものであります。恋愛をしている人の身体をレントゲンやCTで撮影しても愛は写りません。しかし、だからと言って愛はないと言えるのでしょうか。目に見えないけれども厳然としてあるのが愛なのであります。

明治の非凡な詩人金子みすずが美しい詩を残しています。その一つを紹介します。「星とたんぽぽ」という題であります。

青いお空の底深く、海の小石のそのように、夜が来るまで沈んでる、

昼のお星は目に見えぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

この「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬ

ものでもあるんだよ」という言葉には、全ての存在へ目を行き届かせる愛と、隠されているものの大切さを伝える強いものがあります。目に見えなくても、あると信じることの大切さを訴えるこの時には、金子みすずの精神性がよく表れていると思うのであります。

私達は、今、あまりにも、目に見えるもの即ち、現象に惑わされて、目に見えるものばかりを追いすぎています。現象というのは般若心経に謂う「色即是空」の「色」の世界であります。この「色」即ち、現象に惑わされているのであります。その結果、目に見えない大切なもの即ち本質を忘れてるように思います。目に見えない愛を心に持つことを忘れてしまっているように思うのであります。

例えば、レントゲンに写った肉体は、死ねば火葬場で灰になってしまいます。然し、レントゲンに写らなかったもの、即ち、私の母親の愛は、今も私の心の中にあります。見たものは全部燃え尽きます。見えなかったものは燃えることはありません。私達は、この燃えないものを大切にしなければならないと思うのであります。

亡くなった母親が、生きている間に私に与えてくれた愛は、生きている間は目に見えなかったが故に、レントゲンには写りませんでした。したがって、その愛は、母親が死んでからも焼けないで残ります。したがって、愛という目に見えないものは、私達の心の中で育てていかなければならないと思うのであります。

愛とか倫理とかは、目に見えないが故に未だに私達の心の糧になっているのであります。このことは私達ロータリアンが肝に銘ずべきことであります。

6. 『永遠の課題・職業倫理』 その15 『論業類・課題の戯承』 5

前回は愛とか倫理は目に見えないが故に人の心の糧になっていると申しました。では、現在及び未来の問題として、この目に見えない大切なものを一体どのようにして後の世代に伝えていくのか。

例えば、桶の中に小芋を入れてかき回すと、芋と芋とが擦れ合って皮が剥けて綺麗に磨かれていくように、私達は、色々な人と出会って切磋琢磨することによって、心が磨かれて行くのであります。このようにお互いに心を磨き合って人は育つのであります。したがって、吉川英治先生が謂ったように「我以外皆我が師」であります。この世の中は皆がお互いに先生であり、生徒であります。したがって、教科書などはないのであります。私達一人一人の言動や一挙手一投足によりお互いが知らず知らずのうちに教えられ倫理とか道徳が身に付いていくのであります。

では、具体的には、どのようにして知識が血となり肉となって身に付くのか。

それを昔から実践している世界があります。それが禅の世界であります。即ち、

始祖達磨大師から始まって第二祖慧可、第三祖僧燦、第四祖道信、第五祖弘忍、そして第六祖慧能と禅の悟りの境地が受け継がれていったのであります。この第六祖慧能の時代は、中国は宋の国でありました。

この頃、第五祖弘忍は、自分の法脈を継ぐべき後継者を選ぶために、寺内の僧侶達に自分の信ずるところを紙に書いて廊下に張っておけ、といったのであります。その当時、弘忍禅師の後継者として自他共に許す者と自負していたのは神秀という僧侶でありました。そこで、神秀は、自分の考えを偈（仏教の

真理を詩の形で述べたもの。偈頌ともいう。）として書いて壁に貼りました。それは、

「身是菩提樹 心如明鏡台 時々勤拭拭 莫使惹塵埃」この意味は、自分の身体は菩提樹のようなものであり、心は鏡の如く清浄なものだからいつも清らかにして埃のかからないようにしておかなければならないというような意味でありましょう。これに対して慧能も偈を書いて壁に貼りました。それは、

「菩提本無樹 明鏡亦非台 本来無一物 何處惹塵埃」この意味は、本来の世界には、菩提樹も鏡もあろう筈がない。したがって、埃がかかるはずもない。本来何も無いのだ。

本来無一物なのだ、と言う意味であります。

これを見た弘忍禅師が慧能を自分の後継者と決め、夜秘かに慧能を呼んで、「お前に印可を授ける。しかし、お前はこの寺で米搗きをしている最下層の役僧だから、お前に印可を授けたことが判るとお前は殺されるかも知れない。だから、夜の明けないうちに印可と宝物を持って逃げろ」と言ったのであります。

そこで、六祖慧能は、南へ逃げてそこで法脈を継いだのであります。このようにして、宋の時代に、六祖慧能の南宋禅と神秀の北宋禅に分かれたのであります。

北宋禅は、弘忍禅師の法脈を継いでいないのでやがて滅びてしまいますが、六祖慧能の南宋禅は、その後日本に渡来し、道元禅師ほか多数の老師によってその法脈を伝え今日に至っているのであります。これが、目に見えない大切なものを後世に伝える一つの方法であります。

7. 『永遠の課題・職業倫理』 その16

前回、禅の法脈というものが目に見えない大切なものを後世に伝える一つの方法であると申しました。その具体的な方法は、老師が自分の弟子と一つ屋根の下に住み、寝食を共にしながら口移しに正に一挙手一投足によって禅の境地を悟らせるのであります。これが禅の法脈というものであります。これを一子相伝と謂います。

そして、この法脈というものは、何も禅の世界に限っているものではありません。例えば、学問の世界においても何々教授の法脈とか、歌舞伎の世界でも一派を為した役者の法脈というものがあります。ロータリーにもポール・ハリスの法脈とか、初期ロータリーの法脈があります。

もっともこれらは禅の法脈のように厳しいものではなく、謂わば「軽度の法脈」ともいうべきものであります。そして、この意味では、家庭にも法脈があります。即ち、代々の家訓によってその家の法脈が伝えられていくというものであります。そして沢山の人の接触を通じて知らず知らずのうちに知識が血となり肉となって身に付いていくというのであります。このようにして人は育つのであります。

ところが、最近の我が国の職業社会は、この法脈が断ち切れてしまっているかのようにも思われるのであります。

一つの物語を紹介しておきます。1645年73歳でこの世を去った沢庵禅師のところに或る人が花魁の絵を持ってきて、「和尚さん、この絵に賛を書いて下さい」と頼みました。

実は沢庵禅師を困らせてやろうという魂胆でありましたが、沢庵禅師はたちどころに賛を書きました。

「汝四尺の（身体の）真中を売って、一切

衆生の煩惱を安んず。色即是空、空即是色、柳は緑、花は紅」そして、「仏は法を売り、祖師は仏を売り、末世の僧は祖師を売る」と書いたのであります。

つまり、誰もが金儲けのために、一番大切なものを売り物にしているというのであります。皆さん、どう思われますか。今の世の中に似てきていないでしょうか。

今の世の中は、まさに、末世の僧が祖師を売ったに等しい世の中になってきているように思うのであります。そして、これは今のロータリーにも当て嵌まるのではないのでしょうか。ロータリーは、1905年2月23日ポール・ハリスが自らが開発し提案した一業一会員制の原則を2001年の規定審議会で廃止し、更にロータリー創立1ヶ月後の創立総会において確立した規則的例会出席の原則も1968年以降の度重なる規制緩和によって事実上骨抜きにしまいました。これは、末世の僧が祖師を売ったに等しいのではないのでしょうか。正に、ポール・ハリスの法脈は断ち切れてしまったと言わなければなりません。その結果、現在の経済社会は職業倫理が退廃し、ロータリーの倫理運動が全く機能していないかのように見受けられるのであります。したがって、未来は一体どうなるのか、全く混沌として見えません。したがってまた、現在及び未来に職業倫理を正しく伝えていくことは至難の業のように思われるのであります。このように致しまして、まさに「職業倫理は永遠の課題」なのであります。

8. 『永遠の課題・職業倫理』 その17

ロータリーが国際ロータリーレベルで初めて職業倫理を提唱したのは、1915年のサンフランシスコ国際大会で採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」でありました。そして、このロータリー倫理訓の思想が日本に継受されたのは1928年即ち、昭和3年のことでありました。即ち、昭和3年創立の大連ロータリークラブの古沢丈作氏がロータリー思想の源流を探求して、このロータリー倫理訓を発見しました。そして、これを日夜お経の如く熟読玩味し、完全に自家薬籠中のものとしてこの11ヶ条の英文を5ヶ条の日本語に書き改めたのであります。これが日本ロータリー史上有名な「大連クラブのロータリー宣言」なのであります。そして、この「大連クラブのロータリー宣言」が戦前の日本のロータリアンの職業倫理のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。

ただ、このロータリー宣言は、非常に格調の高い文章であり、しかも、文語体であり且つ旧仮名遣いでありますので、今の口語体に慣れた一般の読者には読みにくいところもあるかと思しますので、その逐条解釈をしておきたいと思ひます。

第一 須く事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし。蓋し事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり。故に吾人は道義を無視して所謂事業の成功を獲んとする者に与せず。

「事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし」というのは、ロータリアンは職業人である前に道義を守る人即ち、倫理的な人間であ

れということであり、言い換えれば、二宮尊徳翁の「田畑を耕す前に先ず心の田畑を耕せ」と謂うことでもあります。したがって、これはロータリーが倫理運動であることを示しています。

「蓋し、事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり」と謂うのは、職業人として遅く生きているのは世のため人のために奉仕するためであるという意味であります。

「故に吾人は道義を無視して所謂事業の成功を獲んとする者に与せず」と謂うのは、自分達は倫理を無視して市場原理主義のようにただ金さえ儲ければよいとは考えていない、あくまでも職業は倫理的に営むべし、と謂うのであります。

第二 成否を曰うに先立ち退いて義務を尽さんことを思い進んで奉仕を完うせんことを念う。自らを利するに先立ちて他を益せんことを願う。最も能く奉仕する者最も多く満たさるべきことを吾人は疑わず。

「成否を曰うに先立ち退いて義務を尽さんことを思い」と謂うのは、権利を主張する者は先ず義務を履行せよというフランス大革命以来のスローガンそのものであります。我が国では、株式会社大丸の社訓「先義後利」に当たります。

「自らを利するに先立ちて他を益せんことを願う」と謂うのは、儲けることを考える前に先ず顧客のためになることを考えよということでもあります。

「最も能く奉仕する者最も多く満たさるべきことを吾人は疑わず」と謂うのは、ロータリーの標語 "He profits most who serves best" の確認であります。

9. 「永遠の課題・職業倫理」 その18

前回は、日本ロータリー史上有名な「大連クラブのロータリー宣言」について、その第一項と、第二項について説明致しました。今日は第三項と第四項を説明します。

第三 或は特殊の関係を以て機会を壟断し、或は世人の深しとせざるに乗じて巨利を博す。これ吾人の最も忌む所なり。吾人の精神に反してその信条を紊るは利のために義を失うより甚だしきは無し。

壟断というのは、直訳すれば、断ち切ったように高く聳えたところという意味であります。中国の孟子の故事によれば別の意味があります。それは、或る男が、市が立つたばに高いところを探してそこに登り、市場を見渡して安い物を買ひ占め、これを高い値で売りつけて市場の利益を独占したという故事から、うまく利益を独占することの意味に使われているのであります。

このことで直ぐ思い出されるのは、ライブドアや村上ファンドの事件であります。彼らは、特殊の機会を利用して株価を吊り上げておいて、高値で売り抜け、巨利を博したのであります。正にこのロータリー宣言に所謂「特殊の関係を以て機会を壟断し」「巨利を博」したのであります。このようなことは信義誠実に反し、私達の最も嫌うところであります。これは、利益のために信義を失うことよりも非道い、即ち、人間として最低であると言っているのであります。

第四 義を以て集り、信を以て結び、切磋し、琢磨し、相扶け相益す。これ吾人団結の本旨なり。然れども党を以て厚くすることなく、他を以て拒むことなく、私を以て党する者にあらざるなり。

これは、ロータリアンは一業一会員制の原則によって選ばれた良質な人達であり、しかも、皆、主体性を確立した一国一城の主でありますから、徒党を組んではならないのであります。徒党を組むのは主体性のない弱いもののであります。動物でも麒麟や縞馬は猛獣から身を守るために群れます。しかし、虎やライオンは百獣の王でありますから、決して群れることはありません。したがって、ロータリアンは、恰も百獣の王の如く決して群れてはならないのであります。だからこそロータリー哲学は、個人奉仕の絶対性を説いているのであります。

したがって、曾てポール・ハリスがいみじくも言ったように「ロータリーは団結しないところに美德がある」のであります。この言葉をロータリー哲学によって解釈しますと、「ロータリーには行動の団結はない。しかし、心の団結がある」と謂うことでありまして、ロータリアンは、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」のであります。これが「ロータリーの親睦」なのであります。

しかし、注意すべきは、この親睦は単なる仲良しクラブではありません。親睦のエネルギーを世のため人のために使わなければならないのであります。ここに奉仕の理想のもとに集まるロータリアンの独自性があるのであります。

これを要するに、「群れるな。しかし、排他的になるな」ということであり、正にロータリー哲学に謂うところの「包摂の論理」即ち全ての人に思いやりの心、愛の心で接すること、これがロータリーの奉仕の理想なのであります。

10. 『永遠の課題・職業倫理』その19 業部・聖職の要求

今日は前回に引き続いて「大連クラブのロータリー宣言」の第五項を説明します。第五「徒爾なる角逐と闘争とは世に行わるべからず、協力以て博愛平等の理想を実現せざるべからず、然り吾が同志はこの大義を世界に敷かむがために活躍す、吾がロータリーの崇高なる使命茲に在り。その存在の意義亦茲に存す。」

角逐の「角」は、競うという意味、即ち、競争であります。「逐」は、駆逐の意味でありますから、角逐というのは、互いに相手を落とそうと争うこと、互いに競争することです。したがって、資本主義経済社会では、角逐は自由競争を意味します。そこで、自由競争は進歩のために必要であります。競争無くして進歩はありませんから、自由競争社会では技術革新のためにも競争は不可欠であります。しかし、例え自由競争であっても徒爾なる角逐と闘争即ち、無節操な倫理のない競争は厳に慎むべきであります。ロータリーは倫理運動でありますから、職業人としてお互いに為すべきこと、為すべからざることを誓い合う所謂「職業倫理」を常に自覚しなければなりません。その自覚がやがて企業の社会的責任の自覚へと発展して行くのであります。したがって、職業人にこの点の自覚がなくなりますと職業倫理が頹廃します。

そして、最近の市場原理主義のように職業倫理を失って、ライブドアや村上ファンドのような金儲け一本槍の拝金主義になり、「資本の論理は力の論理」ということになって、大資本は益々大きくなって格差社会となってしまうのであります。そして遂には古代ローマの格言に「人は人にとって狼である」と謂

われているように、弱肉強食の世界に陥って行くだろうと思うのであります。

「歌を忘れたカナリヤ」という童謡があります。歌を忘れたカナリヤは世の中に害を与えません。しかし、倫理を忘れた職業人は、世の中に迷惑をかけるどころか、やがては国を滅ぼすことにもなります。例えば、古代ローマの貴族は、同性愛に耽ったために子孫を産めなくなって50年にして没落し、ローマ帝国が滅亡して、そのあとに中世の暗黒時代が始まったという説もあります。このように、一国の興亡は、国民の倫理の頹廃によることも間々あるのであります。

だからこそ、ロータリーは、人間としてあるべき心、即ち「倫理」を高めることをロータリー運動の第一義としているのであります。そして、どのような不況期にも潰れない強靱な体質の企業に育て上げることが職業奉仕の第一義なのであります。先ず強靱な体質の逞しい企業に育て上げること、レイモンド・チャンドラーが言ったように、企業は逞しくなければ、今の厳しい職業社会を生きて行くことが出来ません。それと同時に、企業は優しくなければ、即ち愛とか倫理がなければ、企業は生きる資格がないのであります。したがって、しっかりとした職業倫理を持った強靱な体質の企業に育て上げることが職業奉仕の第一義なのであり、これが「ロータリーの核にある」考え方なのであります。したがって、第五項の最後に「吾がロータリーの崇高なる使命茲に在り。その存在の意義亦茲に存す」と謂っているのは、まさにこの第一義のことを謂っているのであります。

11. 『永遠の課題・職業倫理』その20 兼業・西暦の出来』01

前回までは戦前の日本ロータリーの倫理訓について申し上げました。では、戦後の日本のロータリーはどうかと申しますと、戦後まもなく東京浅草ロータリークラブの『玩具職業人倫理宣言』があり、その後1983年、兵庫の第2680地区が地区大会特別決議として採択した「ロータリー職業訓」という倫理宣言があり、最も近くは1995年6月28日仙台青葉ロータリークラブの『職業倫理宣言』があります。これらは、いずれも職業奉仕の原理に基づいた素晴らしい提唱なのであります。

このように致しまして、戦前のロータリーは、アメリカも日本も職業倫理が確立していました。即ち、1915年のサンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」が採択されましたが、そのあと1929年の不況を克服して、それ以後1945年の第二次大戦の終戦に至るまでアメリカの繁栄をもたらしたロータリーに一貫して流れていたものは一体何かと申しますと、それは一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則による職業奉仕の実践、そしてその中核にある職業倫理の確立でありました。

また、日本のロータリーも、1928年、昭和3年の「大連ロータリークラブのロータリー倫理訓」によって1915年の所謂「ロータリー道徳律」の精神を受け継ぎ、職業倫理を確立して来たのであります。そして、この状況は少なくとも1960年即ち昭和35年頃までは持続していたのであります。

しかし、その後は物質的繁栄に伴う精神の衰退により、アメリカでは第二次大戦後、日

本では昭和35年以降、職業倫理の衰退が始まったのであります。

その原因は一体何か。元来、現在の不況は、現象的にはアメリカのサブプライムローンに始まる2008年9月のリーマン・ブラザーズの破綻即ちリーマン・ショック以降、世界的不況と謂われる事態となりましたが、しかし、その原因は、既に1980年代の好況期に始まっていたのであります。

日本においても1980年代のあのバブル景気の原因は一体何か。それは、人間が徒に金を求めて倫理を忘れた結果であります。時代はこのときから既に変わりつつあったのであります。それがやがて大統領選挙におけるオバマの勝利や日本の総選挙における民主党の勝利によって時代のダイナミズムが目覚めたのであります。

そして、このように時代が変わった時にこそ、これから何が変わるべきか、何を变えてはならないか、を真剣に考えなければならないのであります。そして、如何なる時代になっても絶対に変えてはならないもの、それが職業倫理なのであります。

ロータリーの職業倫理は、詰まるところ、人は如何に生きるべきか説くものであり、これは万古不易の人間の行動原理であります。

したがって、今こそ、職業倫理が永遠の課題であることを再確認する必要があります。

そして大企業も中小企業もその経営首脳がこぞって職業倫理を回復し、その心を後の世代に引き継がなくてはなりません。そうでなければ、日本民族は倫理を失い、心で滅んでしまうのであります。正に職業倫理が永遠の課題と謂われる所以であります。

12. 『国旗掲揚・国歌斉唱の慣例』

戦前の日本のロータリーは、昭和15年、軍閥の弾圧によって壊滅し、国際ロータリーから離脱しました。ただ、ロータリーが壊滅していく過程の中で、私達の先輩ロータリアン達が色々とその対応策に苦慮しながら、その苦しみの中から、今日のロータリーの一般慣例を生み出していますので、これに触れておく必要があると思うのであります。

それは、クラブ例会における「国旗の掲揚と国歌の斉唱」であります。即ち、昭和8年のこと、ロータリーはアメリカに本部があるスパイの手先であるからこのような団体は、天皇陛下の御為にならない。したがって、解散すべきだとして壮士の一団が京都ロータリークラブに押しかけてきたことがありました。

時の石川芳次郎会長は、『ロータリーというものは、職業人の集まりであって、毎週例会において世のため人のための心を磨き、その磨かれた心をもって、世のため人のために奉仕している団体であります。したがって、我々は、忠君愛国、即ち、天皇陛下の御為にも奉仕活動をしているのであります』と説いたのであります。

しかし、壮士達は、これに納得せず、「天皇陛下の御為にも奉仕活動をしているのであれば、その証を立てろ」と迫ったのであります。そこで、石川芳次郎会長は、『第1に、ロータリー運動というのは、国際的な運動でありますから、例会場に国旗を掲げる慣例をもっていません。しかし、我々は、天皇陛下の御為にもまた、奉仕活動を行うことの証として、これからは、例会場に国旗日の丸を掲げましょう。

第2に、ロータリークラブは、例会の始めに、ロータリーソングを唄いますが、天皇陛下の御為にもまた、奉仕活動をしているということの証として、これからは国歌「君が代」を斉唱しましょう』と。

この二つの条件を提示しましたところ、壮士達は、「よし判った」と言って退散したのであります。一般に「ロータリーの地獄耳」と謂われるように情報の伝達は早かったので、このことが、瞬く間に日本全国のロータリークラブに知れ渡りまして、例会で国旗を掲揚し、国歌を斉唱するのは、右翼撃退に卓効があるというので、この時から、ロータリークラブは、右翼に対する対応策から、例会に国旗を掲揚し、君が代を斉唱することが一般慣例となって今日に及んでいるのであります。時に昭和8年のことでありました。

しかし、事柄は、元来、感情問題でありますから、事態は段々と厳しくなりまして、四王天延孝中将が、内務省の主催で、国際スパイの講演会を開いた時に、『ロータリーは、フリーメイソンの隠れ蓑であり、国際的な秘密結社であるから、アメリカのスパイを養成するものである』と説いて廻ったときに、国論大いに上がりまして、ロータリーは次第に壊滅の道を歩むようになったのであります。

因みに、四王天中将の種本は、フリーメイソンを仇敵視したカソリックの神父ポアステールの書いた【国際ロータリーとマソン結社】【マソン結社の組織と秘密】でありました。

13. 「フリーメイソンについて」その1

● 前回は、フリーメイソン (Freemason) のことに触れましたので、今日はそのことについて少し補足しておきます。

● これは、中世のイギリスから起こったもので、各国を自由に行き来して寺院建築などの仕事をしてきた石工 (Mason) の組合 (Guild) がその前身であります。そして、寺院等の建築物の近くに作った仕事場がロッジ Lodge であり、このロッジで仕事に関する討議や情報交換が行われ、その内容はメイソン以外には秘密にされていたのであります。この秘密主義は、組合でありますから当然のことであります。

● 中世のイギリスには建築業者の組合としてのフリーメイソンが沢山作られ、その棟梁達は、財力を持っていましたから次第に有力な団体に成長したのであります。

● ところが、16世紀半ばからイギリスの政治的動乱によって大建築の需要が減り、フリーメイソンは、建築組合としての組織を維持できなくなり、外部の人も組合に加入させるようになったのであります。このようにして、加入を認められた外部の会員は、Accepted Mason と言われて、当時の政界、財界をリードする有力者が多く加入し、内容の変化と共に近代的なフリーメイソンに移行して行ったのであります。

● イギリス系メイソン (1721) では、バーナード・ショウ、ウインザー公。フランス系メイソン (1725) では、ナポレオン1世。ドイツ系メイソン (1737) では、フリードリッヒ大王、ゲーテ。アメリカ系メイソン (1776) では、ベンジャミン・フランクリン、トーマス・ジェファーソン、ジョージ・ワシントン、ルーズベルト、トルーマン、マッカーサー、

アインシュタイン、デュボン等。日本人では蜂須賀公爵がおられました。

● フリーメイソンとロータリーとの関係については、その特徴を上げればどちらも原理研究会であります。フリーメイソンは試験制度を採用して原理の修得段階を階級化しているのに対して、ロータリーは、「人の上に人を作らず」で階級化はしないのであります。

● また、フリーメイソンは、秘密主義でありクラブ内部の役職を外部に公表しないのに対して、ロータリーは、開放主義であります。

● ポール・ハリスは、1905年にロータリークラブを作った時には、フリーメイソンの秘密主義を導入しようとしたことは明らかだと言われています。何故なら、当時栄えていた社交団体は、フリーメイソンであったからであります。

● しかし、ポール・ハリスは、その後、自信をもってフリーメイソンの秘密主義と一線を画するに至るのであります。それ以来、フリーメイソンは秘密主義、ロータリーは開放主義でありますから、ロータリーはフリーメイソンとは何の関係もないのであります。

● ただ、ロータリーが1910年を超えて、地域社会の超一流の実業家をもって構成されるようになりますと、フリーメイソンで勉強した結果、超一流の実業家になった人が、その職業分類に基づいてロータリークラブに加入するようになります。

● そこで、ロータリーの中でも、殊に国際ロータリーの会長になった人達の中には、何人ものフリーメイソンの指導者が含まれていることもまた、紛れのない事実なのであります。

14. 『フリーメイスンについて』 その2

前回、ロータリーの指導者の中にも多くのフリーメイスンの会員がいることを申し上げました。例えば、東ヶ崎潔元国際ロータリー会長も、数少ない元帥の位にいた一人であることは、歴然たる事実であります。また、岩国のロータリーの親愛なる仲間、故保田浩先生も、昔は岩国のフリーメイスンの会員でありました。

しかし、これは、二つの運動の接点の問題でありまして、ロータリーがフリーメイスンによって動かされていると言うことの論証にはならないのであります。

ところが、当時は、事柄が感情的に捉えられていた時代でありましたから、一般大衆は、簡単に四王天延孝中將の考え方に乗ってしまったのであります。

元来、フリーメイスンの目的は何かというと、人道主義に基づく全人類の殿堂を築くことであり、その集約的スローガンは、自由、平等、博愛なのであります。

そして、その組織の構造は階級制を採っていまして、例えばイギリス系メイスンの階級構造は33段階であり、第1の徒弟から始まり、第2の職人、第3の親方（メイスン）、第4の秘密の親方、第5の完全な親方をはじめ、第31の大審問長官、第32の王者の秘密の崇高な王子、第33の最高の大総監に至るものであります。

そして、それぞれ各段階の試験を受けることによって、その階級が上がっていくのであります。

また、フリーメイスンの活動状況は、それぞれの国や地域によって様々でありまして、秘密を楽しむ単なる親睦団体にすぎないものもあり、或いは、反カソリック運動はするが

スパイはしないものとか、或いは、スパイをしてナチズムに対抗したものとか、まさにその態様は様々であります。

このように、フリーメイスン自体は、本来崇高な目的をもった親睦団体であり、ロータリーとは何ら関係のないものであります。

ただ、当時のロータリーは、超一流の実業家ばかりで構成されていまして、一般大衆の理解の支えがなかったのであります。庶民の中に足を据えられない社会運動というものは、何か事が起こるとバイタリティがないのであります。これがロータリーの弱さでありました。したがって、四王天延孝中將の提唱により国論を挙げてのロータリー壊滅運動が展開されることになってしまったのであります。

当時は、日本の政治権力が軍閥に握られていて、軍閥は、アメリカの国際政策と対立する構えを見せ、何れはアメリカと戦争をしなければならぬという準備作業を組んでいた時代でありました。このような、日米感情が悪化するムードの中で、ロータリーは本部がアメリカにあり、名前がロータリーインターナショナルであります。1850年のパリ宣言、『万国の労働者よ、団結せよ』というスローガン、あの時に掲げられた名前がまたインターナショナルであります。

そこで、ロータリーは赤だとか、ロータリーは国際的秘結社フリーメイスンの隠れ蓑であってアメリカに情報を売るスパイだ、とか謂う理屈が成り立つようになったのであります。勿論、ロータリーは、これに対して、色々反論し、主張しましたが、結局、衆寡敵せず、壊滅してしまったのであります。

15. 『日満ロータリークラブ連合会』その1

前回は、四王天延孝中將の提唱により国論を挙げてのロータリー壊滅運動が展開されることになったということを申し上げました。そこで、当時の指導的ロータリアン達は、これに対して二つの対応策を立てたのであります。

第1は、日満ロータリークラブ連合会という中間管理組織体を形成することであり、

第2は、ロータリーの庶民化の提唱でありました。

第1の中間管理組織体の形成の問題は、当時の国内情勢から見て、ロータリーがアメリカに直結しているという印象を与えるのは如何にもまずいと謂うので、国際ロータリーから離脱する訳にはいかないが、R I B I (Rotary International Great Britain and Ireland) のように、国際ロータリーから一步退いた中間管理組織体を作って軍閥の弾圧を避けようとするのであります。所謂、日満ロータリークラブ連合会構想でありました。即ち、当時、日本全国を管轄していたR I 第70地区を三つに分割して、本州の名古屋以東の東部と北海道を第70地区、本州の西部、四国、九州、台湾を第71地区、そして、朝鮮、満州を第72地区とする構想であります。勿論、国際ロータリーは、全世界のロータリークラブと直結しているものでありますから(R Iの直接監督の原則)、原理上はこのような中間管理組織体を正式に認めることは出来ないのですが、日本のロータリーは政治的な裏取引をしてこれを押し切ってしまったのであります。

尤も、R I B Iだけは、現在も国際ロータリーの中の中間管理組織体として認められています。これは、国際ロータリーの直接監督の原則(直結方式)が出来た1915年の

前年、1914年に当時の国際ロータリークラブ連合会がうっかりと承認してしまったのでありまして、これは本来認めることが出来ないものであります。したがって、それ以後は、R Iも中間管理組織体を一切認めていません。

ところが、日本のロータリーは、昭和14年即ち1939年の6月のクリーブランド国際大会の第9号議案として、日本のR I 第70地区提案としてR I J M案(日満ロータリークラブ連合会案)を提案したのであります。これは、R I B Iに倣って、Jは日本、Mは満州を表していたものであります。

しかし、大会に先立って行われた立法委員会にかけられた時、提案理由説明者の芝染太郎氏によって日本は自らの提案を撤回したのであります。

その理由は何かと謂いますと、芝染太郎氏が、非公式に個々のR I理事の意見を聞いたところ、賛成しているのは、アルゼンチン、ブラジル、ペルーなどの南米諸国だけであり、彼等は、日本の提案に便乗して出来れば自分のところも中間管理組織体を作ろうと考えているらしく、もしこのようなことになると、国際ロータリーの組織の根幹を揺るがす大問題となることに気がしまして、アメリカ側理事の「必ず善処する」という約束を信じて、日本は自らの提案を撤回したのであります。

そこで、やがて、国際ロータリー理事会は、日本の希望を入れて、昭和14年即ち1939年度から、日本の第70地区を3地区に分割し、更に、その連合会を作ることを黙認して、自治地域R I J Mの成立を認めたのであります。

16. 『日満ロータリークラブ連合会』その2

前回お話ししました日満ロータリークラブ連合会は、1939年6月13日、国際ロータリー理事会によって認められたものでありますが、その内容は、

- 第1. 日本の3地区の総括機関として日満ロータリークラブ連合会を組織し、会長1名、ガバナー3名、前ガバナー3名、前会長1名合計8名の委員を置く。
- 第2. 会長はR Iの承認を要せず、委員会がこれを選び、委員の任期は1年とする。
- 第3. 会長選出は、3地区連合大会でこれを行う。
- 第4. ガバナー選挙は、各地区大会で行い、R Iへ通告し、従来と同じく国際大会で選出される。
- 第5. ガバナーの任務は、従来と変わるところなし。
- 第6. R Iへ送金する人頭分担金4\$50セントは、半額は連合会に残して、その費用に充てる。これはR Iに新たな負担を与えるものであります。
- 第7. 以上を昭和14年、1939年7月から実施する。

このようにして、8月26日、R I第70地区協議会が開催され、9月15日、新規約が制定されたのであります。各ガバナーは以下のとおりであります。

- 第70地区 名古屋以東の東日本20クラブ
ガバナー 森村市左衛門(東京)
- 第71地区 西日本及び台湾19クラブ
ガバナー 大沢徳太郎(京都)
- 第72地区 朝鮮、満州3クラブ
ガバナー 貝瀬謹吾(大連)

そして、1939年10月9日、日満ロータリークラブ連合会会長に米山梅吉氏が選ば

れて就任し、連合会を統括することになったのであります。

第1回日満ロータリークラブ連合会年次大会は、昭和15年即ち1940年5月5日～6日横浜会館にて開催され出席者は542名。この大会で連合会会長に米山梅吉氏が再選され、ガバナーノミニーとして第70地区は平沼亮三氏(横浜)、第71地区は岡崎忠雄氏(神戸)、第72地区は篠田治策氏(京城)が選出されています。

大会決議としては、皇軍に対する感謝や傷病兵の慰問などがあり、前夜研究会は、横浜銀行クラブで開催されましたが、ここでは、(1)ロータリー綱領の改訳 (2)日本の国号をニッポンと呼ばせること (3)蒙古、北支方面へロータリーを拡大すること、などが論議されています。

懇親晩餐会は、ニューグランドホテルで開かれ、ビクター専属歌手渡辺はま子らの歌もあって、時節柄、質素ではありましたが、楽しく行われたと言われています。

次の大会開催地は、大阪と決定されましたが、やがて日本のロータリーは国際ロータリーを脱退したため、この大会が第1回且つ最後の大会となったのであります。

日満ロータリークラブ連合会と国際ロータリーとの関係については、日満ロータリークラブ連合会は、昭和14年即ち1939年の7月から認められましたが、陣容を整えて発足したのは、9月末であり、その後の期間も短く、したがって、国際ロータリーとの関係については、当時の各クラブ会員に徹底されていませんでした。この情報伝達の不十分は、時節柄誠にやむを得なかったと言えます。

17. 『日満ロータリークラブ連合会』 その3 日満ロータリークラブ連合会 .81

日満ロータリークラブ連合会成立当時の状況はどのようなものであったか。

当時、既に、ロータリークラブに対する干渉や圧迫が次第にひどくなり、例会にまで憲兵や特高警察がしばしば出席し、また、例会の卓話も、予め警察に届け出なければならなくなつて、クラブもその精彩を失ってしまったのであります。

一説によれば、米山さんが憲兵隊に呼ばれたと謂いますが、この事実はないと思います。

何故なら、米山さんは、貴族院議員であります。しかし、米山さんの側近、芝染太郎さんは憲兵隊に呼ばれて、拷問の場を見せられたと謂います。

また、神戸クラブの小菅金造バスターガバナー（昭和13年・会長）は、時の大阪控訴院長であった長島毅氏から、「君は何も知らないだけだ。早くロータリーを辞めるように」と忠告を受けたと言います。

神戸クラブの直木さんは、昭和9年当時、クラブ幹事でありましたが、神戸高商の五百旗部（イオキベ）教授の卓話【マルキシズムについて】を謄写版刷りで週報の替わりに要約したものを会員に配布したところ、それが警察の耳に入り、幹事の直木さんが三宮署に呼び出されて大目玉を食って始末書をとられたのであります。

実は、その卓話は、マルキシズム反対の卓話でありましたが、警察の言い分は、「今のご時世に、そもそもマルキシズムなる文字を使うことがけしからん」というのであります。

小林桂助さんの話では、会員の誰かが特高（特別高等警察）に告げ口をしたようであります。その頃、警察の方では、ロータリーを

いかがわしい秘密結社だと疑っていたらしく、【家族会】などにも目を光らせていたそうであります。（以上、直木・【私のロータリー50年】P43）

昭和15年9月に日本ロータリーが解散した後の神戸木曜会時代は、特高がクラブ例会に来ていましたが、直木さん達は、特高に御馳走を出して別室へ案内し、例会は水入らずでやっていたそうであります。

また、神戸木曜会に、南方のガダルカナルから帰って来た軍人を呼んで卓話をしてもらった時、その人が、大本営の報道は、勝っていると言いながら、実際は負けているという話を漏らしたところ、神戸新聞の社長だと思いますが、警察に密告したようであります。

そこで、幹事の小林さんが、始末書をとられたと言います。忠義面をしたのだろうと思われまふ。このような事を見ると、クラブ会員の中にも密告をするような人もおり、色々な人が居たと言うことが判るのであります。

昭和15年即ち1940年の7月で年度が変わり、8月10日に予定されていた岐阜における地区協議会に向けて、各クラブでは、色々質疑や提案について協議したのであります。クラブによっては、議論が沸騰し、過激な意見も出ましたが、静岡クラブその他で解散の声まで聞こえて来ましたので、連合会では、岐阜の地区協議会をひとまず延期すると共に、全クラブに対し、8月8日、国際ロータリーとの関係を明らかにする通知書を送ったのであります。然し、結局のところ、この年の9月11日、日本のロータリーは壊滅するに至るのであります。

18. 『日満ロータリークラブ連合会』 その4

前回は日満ロータリークラブ連合会成立当時の状況について申し上げましたが、当時、既に、ロータリークラブに対する干渉や弾圧が次第にひどくなり、例会にまで憲兵や特高警察がしばしば出席し、また、例会の卓話も、予め警察に届け出なければならなくなって、クラブもその精彩を失ってしまったのであります。

しかし、昭和15年即ち1940年の7月で年度が変わり、8月10日に予定されていた岐阜における地区協議会に向けて、各クラブでは色々と質疑や提案について協議したのであります。クラブによっては、議論が沸騰し、過激な意見も出ましたが、静岡クラブその他では解散の声まで聞こえて来ましたので、連合会では、岐阜の地区協議会をひとまず延期しました。しかし、結局のところこの協議会は開かれることなく日本ロータリーは壊滅することになったのであります。

第2のロータリーの庶民化の提唱は、昭和12年、井坂孝バスターガバナーの提唱にかかるものでありまして、シカゴロータリークラブの創立期を見れば明らかなように、ロータリーというものは、元来、庶民のものであると主張したのであります。

しかし、どちらの策をとっても、結果は同じであり、ロータリーが潰されたことは間違いないのであります。ただ、このロータリー庶民化に就いて、特筆すべき人物がいます。

それは、大阪クラブの土屋大夢（本名元作）であります。

彼は、杉村楚人冠の先任者であり、ジャーナリストであり、学者であり、思想家でありました。米山梅吉さんが、東京と大阪との

財界人の違和感を緩和するために大阪ロータリークラブへ入会させたとされています。

彼は、古文書の研究をよくしたのであります。ペンネーム・イザヤベンダサン（著者名山本七平）が引用している【上州松代藩財政建て直しについての日暮綴り】の研究であります。

彼は、1921年9月、アメリカのナッシュビル・ロータリークラブ Nash Ville RC において、二宮尊徳翁の教えについて【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】というテーマで講演を致しましたが、日本へ帰国後、これを英文で論文を書き、昭和3年に東京で開かれた第2回太平洋地域大会 Regional Conference で発表したのであります。その内容は、職業奉仕論でありました。

これは、二宮尊徳翁（1787～1856）の教えを引用し『田畑を耕すに先立って心の田畑を耕せ』という日本人の心にピタッと来るような奉仕哲学の解明をしたのであります。

これは、戦前のロータリーにおける大きな功績でありました。

この英語の論文を翻訳して、昭和9年のRI第70地区大会で、村田省蔵ガバナーが、ロータリーを日本の土壤に親しむように提唱したこと通じて、戦前のロータリアンの中に段々と浸透して行ったのであります。要するに、二宮尊徳の教えは、一杯の神道、半杯の儒教、仏教の融合である。自然観察、自然の法則を理解せよと説いたのであります。このようなことを通じて、ロータリーの日本化の提唱がなされていたのであります。結局、軍閥の弾圧という国家権力によって全ては灰燼に帰したのであります。

19. 『ロータリーの日本化』 その1

日本ロータリーの3代目村田省蔵ガバナーの特筆すべき業績として、ロータリーの日本化の提唱があります。これは、当時の軍閥の弾圧に対する対策論の意味もあったと思われるのですが、国粋主義的ロータリー理論を提唱したのであります。

ロータリーの日本化の問題については、村田ガバナーは、昭和9年にこのスローガンを掲げるときに、昭和3年に土屋大夢が二宮尊徳の考え方を引用して提唱した【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】の考え方がありますが、この考え方に戻れば、これ即ち職業奉仕の開発になる、と説いたのであります。

確かに、ロータリーには、バタ臭いところがありますので、この限りでは、彼の提唱は、決して間違っていないのであります。

また、昭和11年の第8回地区大会では、「大連クラブのロータリー宣言」を翻訳して、これをもって、国際大会で、綱領の改正を求めてはどうか、という意見も出しているのです。

ところで、ロータリー日本化の風は、西から吹いたと言われています。即ち、東京ロータリークラブは、一等国の首都として、いち早くシカゴやロンドン等と肩を並べることを急がなければならなかったのですが、大阪ロータリークラブは、ロータリーを日本の社会へ同化させることに主眼をおいて努力していたのであります。

このように、東京・大阪それぞれの行き方の違いが現れていますが、何れをよしとする問題ではないのであります。

また、村田ガバナーは、ロータリーソングも英語のものではなく、日本人が作ったもの

を唄うべきであるという提唱をしています。

これが実ったのが昭和10年のことであります。実は、昭和52年に直木バストガバナーから頂いた手紙によりますと、この提唱に原動力を与えたのは、実は、1914～15年度の国際ロータリークラブ連合会会長であったFrank L.Mulhollandでありました。

彼は、昭和5年、神戸の地区大会にRI会長代理として出席して曰く。

『私は、ロータリーは、あくまでも世界のロータリーであって、アメリカのロータリーではないと思う。したがって、アメリカナイズされるのには反対である。』

今、英語でロータリーソングが唄われたが、何故日本語の歌を唄わないのか、と聞いたところ、日本語の歌では権威がないと言うことであったが、そのようなことでは困る。

私は、各国におけるロータリークラブが、それぞれその国の風俗習慣によって行われることを希望する』と説いたのであります。

Frank L.Mulhollandは、ロータリーの理論を説くについて、一頭地優れていたと言われているだけに、流石であります。その後、5年の歳月を閲して昭和10年、日本語のロータリーソングが生まれるに至るのであります。即ち、昭和10年5月5日、京都朝日会館で地区大会が開かれ、823名が参加しました。

この大会で、京都・祇園の歌舞練場で東久邇宮殿下御臨席のもとに、新作の日本語のロータリーソングが発表されたのであります。

20. 『ロータリーの日本化』 その2 【日本日の一ひまわり】 .15

前回、村田省蔵ガバナーの提唱するロータリーの日本化の一環として日本語のロータリーソングが作られ、昭和10年の地区大会で披露されたことを話しました。第1位は【旅は道連れ世は情け、情けは人のためならず】という歌でありました。

この歌は東京クラブの杉村広太郎作詞、同じく東京の吉住小三郎作曲でありましたが、後に著作権侵害の事実が出てきましたのでロータリーでは唄わなくなりました。

第2位は、地区大会などロータリーの公式行事では必ず唄われる【奉仕の理想】。この歌は京都クラブの前田和一郎作詞、東京の萩原英一作曲であります。

第3位は、【平和を人の世に植え、親愛の心はぐくむ】という歌。これは神戸の田崎慎治作詞、名古屋の早川弥左衛門作曲であります。殆ど唄われていません。

第4位は、【我らの生業】。東京音楽学校教授高野辰之作詞、東京音楽学校講師岡野貞一作曲にかかるものでありますが、この歌は、今もよく唄われています。

さて、【奉仕の理想】については色々逸話がありますので紹介しておきます。

作詞者前田和一郎という人の職業分類は染料販売でありまして、昭和15年に、ロータリーが軍閥の弾圧によって解散する直前に、京都クラブが国際派と国粋派の二派に割れて例会場も別にした時の国際派の大將格でありましたが、戦後、日本のロータリーがRIに復帰したとき、国際派も国粋派も節操がない、自分は、あくまでも純粋なロータリアンで生涯を終わりたいと言って二度とロータリーに戻らなかったという中々骨のある人でありました。

また、この人はポール・ハリスの肖像画を油絵で描いて京都クラブ事務局に寄贈しています。

なお、【奉仕の理想】の曲は、作詞者前田和一郎さんが、当時、東京ロータリークラブの会員で上野音楽学校の作曲科の教授であった萩原英一氏に頼んで作曲してもらったそうであります。

実は、前田和一郎さんについては、神戸東クラブの末正久さんの興味深いエピソードがありますので紹介しておきます。

それは、関西千種会の前身の兵庫千種会が1976年3月6日神戸国際ホテルで開催されました。テーマはロータリー日本史であり、講師は高松クラブの三宅俊三先生（外科）でありましたが、そのフォーラムで末正さんから聞いた話であります。

実は、末正さんはクラブのシンギング委員長を20数年間しておられたのでありますが、昭和45年頃、この歌はどのような動機で作ったのか、その頃のロータリーの情勢はどのようなものであったのかを作詞者前田和一郎さんに聞こうと思って調べたところ、兵庫県の豊岡ロータリークラブに前田和一郎さんの甥に当たる武田好弘氏（職業分類は、電磁器製造）がいることが判ったのであります。

そこで、武田好弘さんに紹介してもらおうと思って、手紙を出したところ、前田和一郎さん自身から直接、400字詰め原稿用紙4枚くらいの返事が来て吃驚したそうであります。それにはこの曲が作られた経緯や作詞者の思いなどが記されていてロータリー日本史の貴重な資料なのであります。その詳細は次号に。

21. 『ロータリーの日本化』 その3

前回申し上げた「奉仕の理想」の作詞者前田和一郎さんから末正さんに来た返事は次のとおりであります。即ち、「私は、昭和15年の解散命令の時にロータリーを辞めて、その後復帰していない。ロータリーを辞めて30年以上になるが、誰もロータリーの話聞かせてくれない。私は、もう長い間半身不随で老妻と寝たきりの生活をしている。ところへ、君から、このような手紙をもらって非常に嬉しい。

昭和10年に京都で第7回地区大会があった。昭和9年の末頃、私は、ロータリークラブの唱歌委員長をしていた。

ある日、お前も出てこい、と言うので、何事ならんと思って行ってみると、村田省蔵ガバナー、石川芳次郎大会委員長（国旗掲揚・国歌斉唱の慣例を作った時の会長）、そして田辺隆三ホストクラブ会長というお歴々がいた。

「今日は一体何事ですか」と聞くと、「今まで日本で唄っている歌は英語の歌ばかりだから、日本語の歌を作ろうと思っている。そこでお前は唱歌委員長なんだから、そんなもの位作ってみろ」と命令された。私は、とてもそんなことは出来ないと固辞したが、下手でもよかったら作りましょう、ということになってしまった。

そこで、唱歌委員長の経験から、あまり長い文句や難しい文句では、皆が唄ってくれないし、歌も2番3番とあるようなものはだめだから、1番だけの歌を作ろう、ということであの歌が出来た。それでも後から「久遠の平和」だとか「業」などは難しすぎるとクラブ内から文句が出た。しかし、

兎に角、杉村楚人冠作詞の【旅は道連れ】と共にコンクールで当選して、祇園の歌舞練場で東久邇宮殿下御戴臨のもとに発表式があり、殿下から直接賞品を授与された。その時、神戸からは、直木太郎氏、沢田清兵衛氏、湯浅恭三氏が来ていた。

結論としては、「御国ニ捧ゲン吾等の業」のところが、自分は寝ていても気になって仕方がない。もう戦争も済んで、平和国家になったのだから、末正さん、是非一つ、これは「世界ニ捧ゲン吾等の業」と変えるように君から宣伝してくれないか」と書かれていました。

末正さんは、「後で聞くと、この手紙が最後になって、1ヶ月後に前田さんは亡くなられた。

そこで、自分は、「世界ニ捧ゲン」と変えてくれということ、自分に対する前田さんの遺言のように受け取っている。ところが、他クラブへメイクアップに行ったときにそれを唄おうと思うが、彼奴は、文句を知らんのか、と思われそうで、恥ずかしくて実は未だ実行していない」と言っておられました。

その後、私が日本全国の千種会で、この末正さんの話をしましたところ、その後、東北のロータリアンから、我々の地域では「世界ニ捧ゲン」と変えて唄っているという報告を受けております。

因みに、昔の神戸東クラブのロータリーソングは、例えば、高知の宮本ガバナーが公式訪問で来れば【よさこい節】を唄ったり、卓話者が早稲田大学の出身者であれば【都の西北】とか、鉄道記念日であれば、【汽笛一声新橋を】とかを唄ったりして、相手を見て臨機応変にやるので中々ユニークであります。

22. 『日本ロータリーの精神伝統』その1 ロータリー日本国 83

今日は日本ロータリーの精神伝統についてお話しします。これは地区管理が始まる直前のエピソードであります。昭和3年に東京で第2回太平洋地域大会 Regional Conference が開かれました。Regional Conference というのは国際ロータリーが不定期に開催する大会であり、第1回はハワイのホノルル。第2回は昭和3年に東京。第3回は昭和10年にフィリピンのマニラで開催されています。これは、その当時の国際大会開催地から遠い地域である太平洋沿岸諸国のロータリアンの親睦と勉強のための大会であります。東京大会には10カ国から568名が参加しました。

ところで、この第2回太平洋地域大会 Regional Conference のホストクラブは東京ロータリークラブでありました。大会経費を試算してみますと約200万円は必要でありました。これは当時、大学卒の初任給が約60円でしたから大金であります。ところが、東京ロータリークラブは、ロータリアン個人としては、それぞれ実力百万石の金持ではありますが、クラブとしては会費のみによってその経費を支弁するのが原則であり、ニコニコ箱その他の寄付を強制することは出来ません。したがって、クラブ自体には金はありません。しかも、現在のロータリーのようにロータリアンから大会経費として金を取り立てるなどという悪智慧は全くありません。

更に、米山さんなどは、金持ちだとは謂っても入ってくる金を全て世のため人のために使ってしまうから個人資産の蓄えもなく、任意の寄付も出来ません。

そこで、当時は団体奉仕の思考が未だ定着していませんでしたので、ロータリアン達は、漠然と個人奉仕を考えていたのであります。

したがって、どのようにしてこの大会経費を捻出すればよいのか？皆が鳩首協議をしているところへ後に至って日本の4代目ガバナーになる朝吹常吉さんが来ました。朝吹さんは、皆が困っているのをみて『私がその200万円を出しましょう。但し、一つだけ条件があります。私が金を出したことを金輪際口にしないこととあります』と言われたのであります。このようにして、朝吹さんのお陰で、太平洋地域大会は成功裏に幕を閉じることが出来、日本のロータリアンは面目を保つことが出来たのであります。これひとえに朝吹常吉の男気によるものであったと記録に残っているのであります。

では、朝吹さんは金を出したことを金輪際人に言うなど言ったのに何故世の中に知られることになったのか。それは、朝吹さんが亡くなられたお通夜の席で初めて当事者から皆に打ち明けられたのであります。

ところで、朝吹さんと米山さんとは、非常に対照的な金の使い方をした人でありました。米山さんは、入ってくる金を片っ端から世のため人のために使ってしまったが、朝吹さんは、平素はダムの水のように貯めておいて、ここぞという時にダムの水門を開くように一気に大金を使ったのであります。

しかし、二人に共通している点があります。それは、世のため人のために秘かに奉仕をして自分が金を出したことを決して人に言わなかったこととあります。この陰徳陽報の教え即ち、隠れたる徳行はいずれ明らかなる報いがあるという教えは、古来、日本ロータリーの精神伝統の一つになっているのであります。

23. 『日本ロータリーの精神伝統』 その2 —じやーロ日本日— SS

前回は、日本ロータリーの精神伝統の一つに陰徳陽報の教えがあると申しました。

陰徳陽報というのは、淮南子にある言葉で「陰徳あれば必ず陽報あり」即ち、人知れず善行を積んだ人には、必ず善い報いが目に見えて現れるという意味であります。この出典である淮南子というのは、中国の老子と荘子の説に基づいて説かれた漢の時代の著書であって21篇からなっているものであります。謂わば「人間訓」とも謂うべきものであり、人間についての深い洞察を説いているものであります。

この陰徳陽報の教えについて米山梅吉さんは、「ロータリーは、隠れたところに仕事がある。それは隠れているから妙味がある」と謂っています。陰徳陽報という言葉を使わずに、このような平易な表現でロータリーの原理を説いているのは流石だと思っております。

そこで、この具体的事例の一つを挙げますと、昭和の初め、大学に入学したものの父親が亡くなって学資に困っている学生のことを或る人から伝え聞いた米山さんが「学資はいくらほど要るのですか」「毎月30円位です」「それは最低限度でしょう。私が60円出しましょう。但し、私が金を出したとは、金輪際言わないで下さい。或る篤志家から、とだけお伝え下さい」と言って、毎月学資を買がれたという話が残っています。当時、大学卒の初任給は30円くらいの頃でありましたから、60円は大金であります。

やがて、1947年、米山さんがこの世を去られたとき、その学生は或る大学の教授になっていましたが、間に立った人が「あなたの学生時代に学資を買がれた人は、このたび

亡くなられた貴族院議員米山梅吉先生ですよ。せめてお葬式くらいには行かれた方がよいのではないですか」と知らせましたので、その人は取るものも取り敢えず駆けつけたといわれています。このようにして米山さんが人知れず苦学生を助けた例は、誠に枚挙に暇がないのであります。

最近のロータリアンの中には、陰徳陽報どころか自分を売り込むことを考える人が増えているかに思われます。しかし、人に知られるということは決して悪いことではありませんが、知られたいと思う心は未だ満たされない心であり、卑しい心であります。したがって、これはロータリアンの心ではないと思うのであります。

実は、この陰徳陽報の教えは、個人奉仕を原則とするロータリーの奉仕の根本に関わる問題なのであります。この点は、団体奉仕のライオンズの奉仕の在り方とは根本的に異なり、非常に対照的であります。即ち、ライオンズクラブは会員であるライオン個人として奉仕するのではなく、ライオン個人の金を集めてライオンズクラブというクラブとして奉仕をします。したがって、団体奉仕なのであります。

これに対して、ロータリーは、一人ひとりのロータリアン個人が自分の金や労力を使って奉仕をするのであります。したがって個人奉仕であります。これが原則でありまして、例外としては、1923年のセントルイスの国際大会における決議第23-34号に至って初めて例外的に団体奉仕が認められているに過ぎないのであります。このことを肝に銘ずべきであります。

24. 『クラブ例会のもつ意味について』 その1 会附てそや 25

クラブ例会のもつ意味については、まず、クラブとはそもそも何ぞやというところから話に入って行きたいと思います。そこで、クラブ発生の歴史を詳述することは当面の目的ではありませんので、これについては、クラブと呼ばれる社交団体が歴史上発生したのがイギリスにおいてであること、その最古のものはヘンリー4世の時代（15世紀前半）のことであったことを知れば十分であります。

この最古のクラブは、今日の所謂ダイニングクラブであり、社交上の名士が食事を囲んで親交を深めたと聞かれています。

さて、イギリスでクラブ活動が圧倒的に盛んになったのは17世紀のことであって時恰もエリザベス1世時代の経済的發展を経て、17世紀のイギリスの国家的大動乱が国王対国民という形で進められていた時のことであったことは興味深いことであり、イギリスの国民達が国家に対する考え方を交換する場としてクラブを利用したことも興味深いことであります。

また、当時しきりに設けられたコーヒー店に知名の人士が集まり、これが人々の親睦の意見交換の場としてのクラブの発達を助長したのであります。このようにしてクラブは、政治的、文化的、経済的その他千差万別な人々のアイデアの交換の場として用いられたのであります。ロータリークラブが創立当初からアイデアの交換・発想の交換をクラブの重要な機能としていた根拠はここにあるのであります。

そして、18世紀中葉になると、クラブはイギリス以外の欧米諸国にも発展し、19世紀以降になると、クラブ組織も一般的なものから特殊目的なものや特殊階層的なものにな

る傾向があり、例えば、文筆家だけのクラブや、女性専用のクラブやスポーツクラブに至るまで様々なクラブが発生するに至ったのであります。殊に、1883年創立のアレクサンドリア Alexandria は、イギリス女流社会の貴婦人のみによって組織されていたことで有名であります。

このようなクラブというものの特質を大雑把に分析しますと、第1に親睦団体であります。したがって、会員同志の融和が第一の目的でありますから、会員同士はお互いに平等対等の地位が保障され、会員間の権力服従の関係は一切ありません。

したがって、会員に対する統制的要素は殆どないことが一つの特色であります。

第2に、会員組織を維持するために何らかの形で限定会員制を採るものが多く、そのクラブに所属することがその会員の社会的地位を示すような配慮が為されています。この中で最も厳格なのが18世紀後半の“The Club”であり、これは文芸人ら12名をもって組織され、後に40名に増員されて今日に至っています。これには、スウィフトやエドモンド・バークのような偉大な小説家や政治哲学者が会員となり、ここの会員に選ばれることは非常な名誉とされているのであります。ロータリークラブも、当初は一業一会員制の原則を採用して限定会員制を採りましたが、“The Club”のように厳格なものでないことは先刻御承知のとおりであります。ただ、クラブというものは、その会員資格や組織維持の規則が厳格であればあるほどその魅力を増すものであることを忘れてはならないと思っております。

25. 『クラブ例会のもつ意味について』 その2

前回、一般的にクラブというものの特質を大雑把に分析しますと、それは第1に親睦団体であり、第2に、限定会員制を採るものが多いとを申しました。

そこで、親睦団体であることの具体的な意味内容は一体何かと申しますと、先ず、クラブ例会というものは、クラブ会員だけの水入らずの親睦の場であるということにあります。したがって、原理的には、会員以外の者は例会場に入ることを許さない、即ち、会員の家族のみならず配偶者と雖も例会場に入ることを許さないのが原則であります。例えば、1883年創立のイギリス貴族社会の女性の社交クラブ Alexandria に、或る時、皇太子が突然訪れて例会場に入ろうとしましたが、入口に SAA が頑張っていて、只今例会中であるとの理由で絶対に会場内に入れなかったのであります。これは、クラブ例会というものが会員だけの水入らずの親睦の場であり、且つ会員同士の神聖な発想交換の場でありますから、例会中は何人も入場を許さないのであります。したがって、会員と雖も例会中は SAA の許可がないと入場できないのが原則であります。これはクラブというものは、不意の闖入者によって例会の雰囲気は乱されるのを極度に怖れるためでもあります。

ただ、最近のロータリークラブの中には、家族例会などと称して、会員の配偶者や家族を例会に出席させるところがあります。これは会員と家族との親睦を図ることを理由としているようですが、家族との親睦は、例会とは別個の会合を企画・実施すべきであって、例会に会員以外の者を出席させることは、クラブ例会のあるべき姿を乱すものであり、原理的にはロータリーの衰退であります。

最近、国際ロータリーも家族との親睦の企画を推奨しています。そのこと自体は誠に結構なことでありますが、どのような方法で親睦の企画、立案、実施をするべきかについては、クラブ例会の原理と混同しないよう心すべきであります。

なお、家族例会もクラブ理事会の決議に基づいて行われるものでありますから、手続的には何ら問題はありません。しかし、手続が適正か否かということと、その実体が適正か否かとは別個の問題でありまして、手続的に問題がなければ何を企画してもよいということではなく、問題は、その企画がロータリーの原理やクラブの原理に反しないか否かを何時も心に留めておくべきでなのであります。

次に、クラブ例会というものは、そのクラブの会員だけのための例会ではないということに肝に銘ずべきであります。このことは、ロータリーがメイクアップ制度を採用していることからの当然の帰結であります。例えば、伊丹クラブの例会は、伊丹クラブの会員だけのための例会ではなく、それは同時に全世界のロータリアンのための例会でもあります。

何故なら、ロータリアンであれば、世界中の何処のクラブにも予め断ることなく、何時でも自由に出席できる特典を持っているからであります。このことを逆に言えば、伊丹クラブにも世界中のロータリアンが何時でも何の断りもなく突然に出席出来ることを意味するのであります。したがって、ロータリークラブの例会というものは世界に開かれた例会なのであります。これは、クラブというものが原理的に本来閉鎖社会であることの例外なのであります。

「栗を拾った話—石門心学に学ぶ—」伊丹 RC 卓話

2010.3.4

深川 純

去る2月27日の地区大会で石門心学の教育対談があり、その冒頭のビデオに子供が栗を拾った話がありました。それは、子供が山で栗を拾って帰ってきたところ、父親がその栗は人様の山に落ちていた物だから、すぐに返して来なさいと窘めて、その栗を山に返しに行かせたという話であります。

これは、石門心学の中核にある教えだとして、人様の物を取ってはならないという教えを子供の心に植えつける上で大切であるという話でありました。

勿論、これは正しいことであり、道徳教育としては欠くことの出来ない教えであります。このこと自体は、道徳上も社会倫理上も何らの疑念を差し挟む余地はありません。と一応は考えられます。しかし、果たしてそうなのか、これが絶対唯一無二の真理なのか。

他に考え方はないのか。というところからロータリーの思索は始まるのであります。

ロータリーのバイブルと謂われた1923年度のR I 会長ガイ・ガンディカー Guy Gundaker の著書「ロータリー通解」によれば、「ロータリアンは思索する人でなければならない」と説かれています。では、私達ロータリアンはこの問題についてどのように考えればよいのでしょうか。

まず、栗は自分の物ではない、人様の物だから山へ返すべきだということは、自分の物と他人の物とを峻別する論理が前提となっています。この峻別の論理は本来、西洋の論理であります。自分の物は他人の物ではない。

他人の物は自分の物ではない。即ち、自他

を峻別する論理であります。

しかし、この峻別の論理は、果たして絶対的なものなのか。私達21世紀の人類社会の全てに当てはまる万古不易の論理なのでしょうか。例外はないのでしょうか。

この峻別の論理は、一つの物については一つの所有権しかない、ということですが、日本の社会には一つの物に二つ以上の所有権が併存するという所有形態があります。

それは村の山林などについての入会権即ち、村の人であれば誰でもその山の果実を取ることが出来る権利であります。これは共同所有形態の「共有」に対して「総有」と呼ばれています。

例えば、昔から日本の地域社会の慣習として、子供が山の柿の実を取ってもそれを許す文化がありました。また、柿の木の上の方にあるか木の実は取らずに残しておく、それは鳥達のために残すという文化がありました。

これは、人様の栗を採ることは悪いことだとしながらも、子供が小さい時にはそれを許す、そして子供が成長して物心がついて是非の弁別が出来るようになれば他人の栗を採ることは許されないことだと解って、それをしなくなるだろうという考え方であります。

私は、これを包摂の論理だと考えています。

しかし、石門心学の論理は、社会的に許されないことは子供の時から厳しく躾けるべきだという考え方であります。どちらの考え方がよいのか。見方によれば、石門心学の論理は、法の世界の論理であり、子供を許す論理

は倫理の世界の論理であるとも言えます。

ロータリーは勿論、法の世界にあるものではなく、倫理の世界にあるものでありますが、さて、どう考えるべきでしょうか。

今、自分の物と他人の物とを峻別すると謂いましたが、そもそも自分の物というものなどあるのでしょうか。自分の物について絶対的な所有権を認めることは、紀元後3世紀に制定された古代ローマのローマ法にある原理であり、それ以来、1700年の歳月を閲して今日の日本民法第206条にまで規定されているところでもあります。所有権とは、自分の物を自由に使用、収益、処分する権能を謂うと定義されています。これは、自分のものと他人のものとを厳然として区別する、所謂峻別の論理であります。

しかし、この論理は法の世界であります。

これに対して、ロータリーは倫理の世界であります。倫理の世界では如何に考えるべきか。

例えば、著作権とか、特許権は、自分の著作に就いて、それを権利として守り、その権利は自分だけの物だとして、他人の権利を排除します。

しかし、どのような著作物も、その人が独力で開発した物など存在はしません。その著作は、先ず自分を産んでくれた両親あってこそのものであり、その著作を作る能力は両親から授けられたもの、更に謂えば神仏から授かったものであります。のみならず、その著作は、学校の先生をはじめ、会社や業界、地域社会の先輩、同輩初め沢山の人のお蔭であります。このように考えれば、自分一人の能力で作りましたものなど何もありません。したがって、謙虚に考えれば自分のものなどというものはなく、全ては全体のものなのであります。私が原則として自分の著作

を出版しないのは、自分の物などはないと考えているためであります。

では先程の人を許すという文化について、日本の文化の中で育ってきた私達ロータリアンとしてはどのように理解すればよいのでしょうか。

ロータリーは、元来、アメリカで育った文化であります。では、そのアメリカで育った文化を私達日本のロータリアンとしてはどのように理解すべきなのか。

謂うまでもなく、このことは先ずアメリカのロータリーの歴史に学ばなければなりません。アングロサクソン文化の支配するアメリカは、キリスト教文化の世界であります。キリスト教は一神教であり、神を信ずるものだけが救われ、信じないものは蛮族という考え方です。そして、キリスト教やイスラム教は、厳しく戒律を定め、それを守るべきだとして、その戒律を破ると例外なく罰せられる信賞必罰の原理主義社会であります。このような原理主義社会には、人を許すという文化はありません。勿論、日本にも刑罰はありますが、アメリカと異なり死刑から執行猶予まで大きな幅があります。

御承知のとおり、日本は一神教ではありません。日本人は無信仰者が多いとも謂われますが、宗教心はあります。したがって、無信仰というよりも寧ろ多神教であります。人間のみならず、動物や一木一草に至るまで佛の心が宿っているという考え方です。したがって、例えば、私達多くの日本人は、キリスト教、マホメット教、イスラム教のような特定の宗教一つだけを信仰するのではなく、日本人の宗教心、宗教観には、各人それぞれに、仏教、儒教、神道、キリスト教その他諸々のものが混在しています。したがって、

アメリカのように日曜日には皆が必ず教会に行き、唯一の神に祈るといった習慣はありません。平素はそのような儀式は何もしないのに、正月には神社仏閣に初詣をし、春と秋の彼岸には先祖の墓参りをし、盆には、墓参りや寺参りをします。猟師は鮎供養など平素自分が殺生している魚や動物の供養をします。そして、クリスマスには教会に行ったり、家庭でお祝いをしたりします。要するに、一神教ではありませんから、特定の宗教を信仰することはありません、何でもよいのであります。

したがって、一神教のように厳しく戒律を守ると謂うこともありません。逆に言えば、戒律を破ったものには信賞必罰で望む原理主義社会ではなく、罪を憎んで人を憎まず、即ち、人を許す心があります。その代わり、日本文化の中には、自分の行動を規律する心構えとして、例えば、「お天道様が見てござる」だから悪いことはしない、という考え方があります。

要するに、無宗教といわれる日本人の宗教観は、キリスト教、イスラム教その他諸々の宗教を超えたもの、即ちこの宇宙を統べてある大なるものを信じています。したがって、これらの日本人は、キリスト教のような特定の宗教は信じなくとも、その大なるもの、それを神と謂ってもよい、佛と謂ってもよい、自然の摂理と謂ってもよい、要するに、森羅万象を統べて在るその大なるものを信じていますから、その他のことは何でもよいのであります。この大らかな心、動物のみならず一木一草に至るまで佛の心があるという、全てを包摂する大きな心、ここから人を許すという文化が生まれたのではないかとも思うのであります。

では、一神教を信奉する原理主義のアメリカ

には、人を許す文化はないのか、というと、実は、アメリカに育ったロータリーには、人を許す文化があります。そして、それを自覚したのは、敬虔なクリスチャン、ポール・ハリスでありました。

それは一体どういうことかと申しますと、それはロータリー奉仕哲学の中核に在る思想でありまして、これは約3時間位かかる可成り長い話になりますので、今日はその一部分だけを申し述べます。即ち、

1905年、ポール・ハリスは親睦を説いてロータリークラブを創りました。そして1907年、ロータリーは世のため人のための奉仕と謂うことを自覚しました。そこでポール・ハリスは、奉仕を親睦より高次元のものと考え、親睦を軽視したのでクラブは荒れ続け、これは1910年に全米ロータリークラブ連合会の創立により一応終息しました。そこでポール・ハリスは自分の過ちを反省した結果、ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿ると大悟したのであります。即ち、「親睦と奉仕とを等位の概念として捉えるべきであった。この両者は、ロータリークラブという社会制度において表裏一体の関係にある。いずれを優先させてもいけない。親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る」と。このことを大悟した時に、將にロータリー思想の原点が確立されたのであります。

ポール・ハリスは、この時の気持を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文 "Rational Rotarianism" であります。これは、合理的な立場から考えると、ロータリーの思考というのは、どのような特徴を持った思考なのか、と謂うことを解説したものであります。ところで、"Rational Rotarianism" においてポー

ル・ハリス曰く「自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】tolerationと答えるであろう」と。

これがポール・ハリスのロータリー理論、ロータリー=寛容論であります。したがって、彼は「ロータリーは、親睦と奉仕との調和の中に宿る」と説いたわけであります。ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。寛容な心を持つこと。自分の考え方を人に押しつけてはならない。人を責めるな、過ちがあっても人を許す心を持つこと。ロータリーはこのような思考の世界の中にある。これがポール・ハリスのロータリー理論でありました。

私は、ポール・ハリスが説いた「ロータリー寛容論」は、実は非常に東洋的な発想に基づくものと思うのであります。何故なら、初期ロータリーの1915年のサンフランシスコの国際大会で採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」は、第11条の「黄金律」に象徴されるように非常にキリスト教の色彩の強いものでありましたが、実は、ポール・ハリスの提唱した「ロータリー寛容論」は、その思想を越えるもののように考えられるからであります。

哲学者田中忠雄先生の説によりますと、イギリスの世界的な論客アーノルド・トインビーは「キリスト教的不寛容では、現代の対立を救い得ないという発想から、アジアの精神的基盤に人類の運命の希望を繋ぐ」ということを謂っています。

殊に、アジアの精神的基盤である「禅」の神髄は明らかに「寛容」にあります。それは、

多くの流派を擁しながら度量の狭い縄張り争いをしたことは非常に少ないのであります。

禅の訓練は峻烈を極めたものではあっても、なお仏陀の慈悲を背負っています。慈悲とは他者の身になって感ずるという人間最高の能力のことです。それが正に「寛容」ということの真義なのであります。

私は、昨今の国際社会、殊にアメリカを中心とする様々な対立の状況を見ると、誠にアジアの寛容こそは今や世界救済の原動力でなければならないと思うのであります。

また、昔、イタリアのアンドレ・オッティ首相は、マルタ島で開かれた世界宗教者会議において、「宗教家は、「寛容」と謂うことを説くが、自分を絶対視して相手を許すというのは「寛容」ではない」と言い切っていますが、誠に傾聴すべき見解であると思うのであります。

「寛容」について哲学者田中忠雄先生は、仏陀の教えにある「一水四見の譬え」ということを説いておられます。これが判ると人間は度量が大きくなって「寛容」になれるようであります。その要旨は次のとおりであります。

先ず、「天人」は水を珠玉と見るというのであります。その意味は、天人が羽衣で水面を羽ばたくと水滴が飛び散って玉となり、七つの色に光るというのであります。したがって、天人にとっては、水が珠玉に見えるのであります。

ところが「鬼畜」は、水を血と見ます。その意味は、鬼畜が水に入ると、忽ち七転八倒して苦しんで死にます。したがって、鬼畜にとっては水が忌まわしい血に見えるのであります。

これに反して、「龍」は水を宮殿と見ます。

龍にとっては水ほど住みよい場所ありませんから、龍にとっては水は金殿玉楼であります。

もし、誰かが龍に向かって、「お前の住んでいるその宮殿は、実は流れているのだよ」と言えば、龍は「そんな馬鹿なことがあるか」と笑い飛ばしてしまうでしょう。

そして、最後に、「人間」は水を水と見るのであります。

そこで、道元禅師は「随類の所見不同なり」と謂われたのであります。「天人」「鬼畜」「龍魚」「人間」という具合に、それぞれ類に従って見るところが違うのであります。したがって、人間も自分達が水を水と見るからといって、他の種族も同じく水と見なければならぬと強制することは出来ません。人間も、やはり多くの種族の内の一つにすぎないのであります。人間だけが「水それ自体」とでも謂うべき客観的真理を知っているわけではありません。これを道元禅師は、「本水なきが如し」と言われたのであります。

珠玉でもなく、血でもなく、宮殿でもなく、水でもなく、本水（本当の水）というようなものが別にあるわけではないのであります。

仮に、そのようなものがあるとしても、どうして人間がそれを知ることが出来るでしょうか。人間が知るの、やはり「随類の所見」の一つとしての水に過ぎません。

然るに地上の人間は、随分思い上がって、宇宙を自分中心にばかり考えます。便所の糞壺が汚いものだとかばかり思いこんで、それが、ウジ虫達にとっては無上の楽園であることを忘れてあります。

この思い上がった独りよがりの人間中心主義の思想が根本になって、人間の間にも独りよがりの「非寛容」が出てくるのであります。

宇宙が人間の為存在するかの如く錯覚したのと同じ原理で、世界や社会は一民族、一国家、一階級のために存在するかの如く思いこんで行動します。そこに、救われ難く対立する「二つの世界」の葛藤が生ずるのであります。

刻々に起こる国際的並びに国内的な一切の問題は、例外なく「一水四見の理」で動いています。左とか右とかの色分けで、自分の主張を絶対化し、自分だけが正義だと思ひこむ悪習から速やかに脱却する必要があると思うのであります。したがって、正にアジアの道に参ずるべきであります。東洋思想には本当のゆとりがあると思うのであります。

ところで、1910年、ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る、したがって、ロータリーは寛容であると大悟したポール・ハリスは、自ら敬虔なクリスチャンであり、キリスト教の「非寛容」の世界に住む人でありました。にも拘わらず、彼が敢えて東洋的な「寛容」の哲理を説いたということは誠に驚くべきことだと思うのであります。この意味において彼は偉大なる思想家であると思うのであります。

このように致しまして、ポール・ハリスが1910年、「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と大悟した境地は、まさに「ロータリーの真髓」に当たるものなのであります。

重ねて申し上げます。『ロータリーとは寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。決して自分の考え方を人に押しつけてはならない。人を責めず人を許す心をもつ。このような思考の世界の中にロータリーはある』これがポール・ハリスの

.....あ と が き.....

思い起こせば「純ちゃんのコーナー」発足のきっかけは2001年の規定審議会で1業1会員制が多会員制へ変更となり、標準クラブ定款にとらわれないパイロット・プロジェクトの試行（e-クラブ）等、ロータリーの根幹を揺るがす決定が行われたことにあります。今年度も規定審議会開催年度で、そのパイロット・プロジェクト（e-クラブ）は今や、各地区に2クラブまで認められた状況となっています。更に近年、経済社会では職業倫理に反した経済活動が世間の非難を浴び、一般社会に混迷を引き起こしています。

こうした社会情勢の今こそロータリーは本来の原理・原則即ち「ロータリーの心」を正しく理解し、地域社会に貢献することが求められています。

PARTIXとなる今年度「純ちゃんのコーナー」は昨年引き続き「永遠の課題・職業倫理」に始まり「日本のロータリー」等幅広く掲載されています。

今後とも、折に触れ、頁をめくって頂ければ幸いです。

最後になりましたが、深川純一先生の長きに亘るご厚意に心より御礼申し上げます。そして、発刊にご尽力頂いた前年度：武内利熙会長、松本輝明幹事、事務局の吉永恵子さんに深く感謝致します。

2010年7月 伊丹ロータリークラブ 雑誌・ロータリー情報委員会

